
怪人イルミネーション

光太郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

怪人イルミネーション

【Nコード】

N2494D

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

俺は八年ぶりにこの地を訪れた。八年前と変わらない笑顔で、祖父が待っていた……ただ、祖父はもう、遺影となっていたけれど。

劇場『すぽと』からお題をいただいて執筆しました

俺はここが嫌いだ。

八年ぶりにこの地を訪れたというのに、性懲りもなく、俺はそんな感想しか抱けないでいた。

時代の波に取り残されてしまった、絵に描いたような田舎。のどか、といえば聞こえはいいが、娯楽になるようなものは何一つない、くだらない場所。

目の前で、いつでも笑顔だった祖父が、やはり笑っていた。

どんな悪戯をしても、どんなに心ないことをいつても、いつでも笑っている人だった。どんなときでも、波立たず、穏やかに。

まるきり、この場所のような人だった。

幼かった俺は、それを、つまらないとしか感じなかった。

いまは違うのかと問われれば、正直なところ、どう答えればいいのかわからない。あれから八年、大学二年になった俺は、大人にはなったのだろうが、あのころをもう一度考え直すには、ときが経ちすぎてしまったような気がする。それとも、ひよっとすると、まだ足りないのだろうか。

ともかく、こうして、線香の匂いを嗅いでいても、何も感じないのだ。

バイトを理由に葬式にすら間に合わなかった、そのことでさえも、俺に罪悪感を与えない。

ただ、いつも出迎えてくれたあの笑顔が、今は、額縁の中にしかない。その事実が、ほんの少し　違和感、のような、何かひどくわかりづらいものとなって、俺の胸の中に侵入してきていた。

ふと視線を移すと、仏壇の横に、小さなツリーが置かれていた。家主がいなくなったばかりだというのに、キリストの祭りでもや

るといふのだろうか　皮肉めいたことを思いかけて、そういえば、と苦笑する。純和風の木造家屋に住み、菓子といえば饅頭、食事もすべて和食でありながら、どういうわけか、クリスマスの大好きな人だった。

俺は瞳を閉じた。

遅れて、懐かしさが、去来した。

クリスマスの思い出をさかのぼっていくと、必ず、この田舎に行くべき当たる。

それこそ赤子のころから、クリスマス前から正月明けまでは、毎年この田舎で過ごしていた。小学校低学年のころまでは、それでも楽しみにしていたような気がする。終業式が終わった次の日に、家族で車に乗って出発。この田舎で、優しい祖父母に迎えられ、掘りごたつに入って鍋をつついて　特別に何かがあるわけではなかったが、このあたたかい場所で過ごす日々は、自分にとって、大切なものだった。

しかし、四年生ぐらいからだっただろうか、年末年始という貴重なきを、ここで過ごすことが、苦痛になってきた。ゲーム機もなければ漫画もない。コンビニでさえ、車に乗って二十分。家を飛び出しても、山と田んぼがあるだけだ。

二学期も終わりになると、友人たちは、クリスマス会だの初詣だの、何か楽しい計画の相談を始めるのだ。それに参加できないことが、悔しくて、寂しかった。

あれは、六年生のときだ。抵抗もむなしくこの田舎に連行され、することもなく、毎日ぼんやりとビデオを見ていた。祖父が、何年も前に買ってくれたビデオだ。いまでも覚えている、ずいぶん流行った、『鳥獣戦隊ウイングレンジャー』のビデオ。もう台詞がいえるほどに見飽きていたが、田舎ではおもしろい番組も映らず、そればかり見ていた。

テレビの前から動かない俺に、祖父が、声をかけてきた。

「健はそのまんがが好きじゃのう」

俺は答えなかった。別にもう好きではなかったし、第一、これは特撮であって漫画じゃない。そういうことに変にこだわるあたり、すねていたのだと思う。

「健には、ここは、つまらんか」

変わらない声音で、祖父は続けた。俺はどきりとしたが、正直に答えた。

「つまらん。なんもないし」

「ほいじゃあ、なんだつたらつまらんくないんかいの」

俺は、テレビに向かったまま、祖父の方を見なかった。さっきまで父が見ていたニュースに映っていた、都会の映像を思い出し、ぶっきらぼうにいった。

「街に行ったらさ、ぴかぴかのクリスマスツリーとかあるんだって。ふつう、俺らぐらいになると、そういうところに遊びに行くんだ。

こんな山奥じゃ、なんもないから、つまらん」

祖父はなぜか俺の隣に来て、座ってテレビに向かった。

それでも俺は隣を見ない。

「ほうか。あれか、イルミネーションか。こつちでも電車乗って中央まで出んさつたら、ちよつとはやつとるんじゃないか」

イルミネーション、という単語が祖父から出て来たのが驚きだった。少し悔しいような気もした。

「何時間かかるんだよ。いいよ。たかが知れてるし」

対抗するように、大人の言葉を使う。祖父はもう一度、ほうか、といった。

そのまま、二人で、テレビを見た。何十回も見ているとおり、怪人が出て来て、町の人が襲われて、ウィングレンジャーが怪人を倒して、終わった。

いつもは見ないエンディングも、なんとなく気まずくて、そのまま二人で見る。

次回予告まで終わったところで、不意に、祖父がいった。

「怪人イルミネーションじゃな」

「……は？」

これだからじいちゃんは、と思った。話題を合わせようとして、とんでもないことをいう。いま出て来たのはザリガニの怪人であつて、そんな名前ではない。

「健、来年はおもしろいぞう。怪人イルミネーションが出よるけえ。健が変身して、やっつけんさいよ」

俺は思いきり嫌な顔をして、立ち上がった。

それでも、祖父は、いつものように笑っていた。

その冬を最後に、俺はこの地を訪れなくなったのだ。

「健ちゃん？」

祖母に呼ばれて、我に返った。

八年の間に、ずいぶん小さくなってしまった。子どものころは、怒ると怖い人だと思っていたが、いまではこのしわくちやの小さな人から、怒っているところなど想像できない。

「寒いじゃろ。茶でも飲みんさい」

呼ばれるままに、居間に移動する。さすがにもう掘りごたつではなく、電気ごたつになっていた。それが望む姿であつたはずなのに、勝手なもので、少し寂しいような気がした。

座ってみて、気づいた。ほつれた布団。新しいものではない。

「これね、じいさんが買ったんよ。都会じゃあ、掘りごたつはもうないいうて、だいぶ前に」

気づいたわけではないだろうが、目を細めて、懐かしそうに祖母がいう。俺は言葉を返せなかった。葬式に来れなくてごめん、八年間も、手紙一つよこさなくてごめん　いわなくてはならない言葉がつかえて、得意なはずの世間話も出てこない。

「健ちゃん、大きくなって。クリスマスにこんな田舎に、ごめんねえ。じいちゃんも喜んでるじゃろうねえ。健ちゃんが来るの楽しみにしとったけえ、会えて良かったいうて」

俺は無言で、出された茶に手をつけた。そうでもしないと間が保たなかった。謝罪の一言が、なぜか出てこないのだ。

「ああ、クリスマスに来てくれんさったのは、じいちゃんの想いが通じたんじゃないか」

思い出したように、祖母が呟いた。

まだ身体は暖まっていなかったが、小さな祖母が立ち上がるので、後に続いた。

勝手口から外に出て、裏の庭へとまわる。着いたときには夕方だったが、もうすっかり日が暮れていて、街灯一つないこんな田舎では、家から漏れる灯りだけが頼りだ。

記憶にあるかぎりでは、小さな畑と、鯉が住む池があっただはずだ。見渡す向こうは完全に暗闇で、何も見えない。

「健ちゃん、目つぶって」

閉じていなくても似たようなものだったが、いわれるままに、目を閉じた。

そのまま十数秒、静寂の中で時を待つ。祖母はどこかに行ってしまったのだろうか。暗闇の中に取り残されたような、心細い気持ちになる。

ああ、俺はこのまま、罰を受けるのかもしれない　ひどいのしりを受け、後悔のまま、ここで消えていくのかもしれない……

そんなとりとめのないことを考えた。こうしてじっとしていると、本当に消えてしまいそうだった。

突然、まぶたの向こう側が、輝いた。

俺は目を開けた。

まさか、と思った。

四方から俺を照らす、光、光、光。

「……………これ……………」

「綺麗じゃろう」

俺は、瞬くことも忘れ、見入った。

池の周りを、畑であった場所を、地面を、家の外壁を　庭から見渡すすべてを、電飾が飾り立てていた。

街で見るイルミネーションとはほど遠い、ただ電球をちりばめただけの光たち。よく見ると、遠い昔に遊んだ記憶のある、ウイングレンジャーやその他もろもろの人形たちが飾られている。置かれて何年も経っているのだらう、色あせ、壊れてしまっているものも少なくない。

「じいちゃんが、都会のクリスマスはこうするんじゃないよ。毎年、少しずつやってくるうちには、家までぴかぴかにしてしまったんよ。困ったじいちゃんじゃねえ」

台詞とは裏腹に、祖母は微笑んでいた。

俺も笑い返そうとして、顔の筋肉が上手に動かないことに気づく。右手を持ち上げると、あたたかいものに触れた。

いつの間にか、涙が流れていた。

「ああ」

俺を見て、祖母は、いつそう嬉しそうに、笑った。

「良かったねえ、じいちゃん」

「……………！」

様々な言葉が喉から飛び出しそうなのに、なにひとつ声にならなかった。

俺は、祖父を想った。

この庭を、光で埋めていった祖父。俺の好きだった人形を探して、一つ一つ、並べていった祖父。

驚かせてやろう、今年は来るだろうか、その次は来るだろうか。光の中に、笑顔の祖父の姿が見えるようだった。それなのに、俺はそれをことごとく裏切ったのだ。つまらないと吐き捨てて、この地を捨てたのだ。

「……………じいちゃん……………」

呼びかけだけが、声になった。

「ごめん、と出来ない理由が、わかった気がした。

いくら謝罪を吐いても、もう届かないのだ。いくら感謝を告げても、もう、あの笑顔は返ってこないのだ。

それでも、俺は、息を吸い込んだ。

この光の中に、祖父の姿が見えるのならば、いまなら伝えられる気がした。

「ごめん、じいちゃん……ありがとう……！」

嗚咽にまみれた、二つの言葉。

ほうか、と祖父の笑顔が見えた気がした。

涙が一気に溢れた。

もう遅い。

もう遅いけれど

つまらないなんて嘘で、

俺はこどもだったからあんなことをいってしまったけど、大好きだった。

本当に、大好きだった。

祖母が、そっと俺の肩を抱いた。

その頼りない、しわくちやの手が温かくて、俺はこどもみたいにしゃくりあげて泣いた。

「……ばあちゃん」

聞いたことのないような、うわずった声だったが、それでも俺は続けた。

「俺さ、また毎年、ここ来るから　彼女できて、結婚して、こどもできてさ……ばあちゃんがひいばあちゃんになって、それでもずっと、来るからさ……」

「ああ、そりゃあ、じいちゃん喜んでねえ」

俺は、むりやり笑った。

田舎の寒さが刺すようなのに、おかしくらい暖かかった。

このあたたかさを、いつかできるであろう自分の家族に、伝えられたらいい。そんなことを思いながら、笑った。

俺は忘れない。

自分の過ちも、今日のこの光も、決して。

(後書き)

よんでいただき、ありがとうございました。

劇場『すぽっと』にて、『怪人イルミネーション』というお題を
ただいて執筆したものです。

とても素敵なお題がたくさん紹介されている他(参加自由!)、い
ろんな作者様の作品も読めます。そちらもぜひ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2494d/>

怪人イルミネーション

2009年3月24日09時45分発行